

## 晩秋の北輕井澤大學村

山内 裕子

平成二十八年十一月二十八日

霜月五日、秋晴の豫報に誘はれ晩秋の北輕井澤に赴く。物心つく頃より夏休み過したる標高千百米の高原なれども未だ紅葉の季節を知らず。

關越道にて輕井澤に下り立つや山紅葉淡く濃く照映え舊輕三笠界限の唐松黄葉まさに見頃なり。白絲の瀧の邊、行樂客途絶ゆることなく熊出現の懼れもなし。迸り出づる豐なる清流は淺間山幾歳月と貯へおきたる岩清水、大自然の妙なり。樹林抜け峰の茶屋より望む淺間嶺きらりと新雪輝き晴れやかなり。

程なく北輕井澤大學村に到着。黄金色の落葉松林、佛蘭西繪畫に見る風景の如し。昭和初年祖父の建つる山小屋を今春取壊したる址いかに。既に千坪の原生林に還りたる姿に驚く。幼き日の紫の桔梗菖蒲咲きし叢は何處に。

六十年の星霜、樅、赤松、落葉松、見上ぐる程の高木空を狭め、紅葉雜木枝伸び、地表は落葉厚く積り、實生たくましく育つ。倒木の事件間及び其の怖れありや憂ひて樵の友人と見廻る。甘米越えたる樹木多數繁るも枝張り支ふる由、倒木の危険なきこと確認、安堵致す。されど枯枝落下の危険なきにしもあらずと。朴木の大葉音立て散る。遠く薪割の音、鳥の聲かすかなり。

一つ隣に田邊元山莊あり。『田邊元・野上彌生子往復書簡』に關心もつといふ友を田邊山莊に案内、敷地内の墓碑に生涯眞理探究とあり京大學派の哲學者の面目躍如たり。落葉踏み十分程小徑歩み野上山莊を経て谷川徹三・俊太郎山莊に至る。後日圖書館にて同書披くに昭和知識人の交流面白し。岸田衿子『たいせつな一日』も此の村にて綴りたる詩集なり。誰もいそがぬ村の緩かなる時の流れ懐し。

天明年間の噴火後二百三十年。火山灰覆ひたる大地、北白川宮牧場民間に拂下げを法政大學學長求めける後、同僚教授に月賦にて頒布、文人學者の避暑地にて九十年、草花咲く野は夢の彼方に消え森に變る。刻々變貌を遂げたる大地の姿を畏れ、時の流れに感じ入る秋の一日なり。

(平成二十八年十二月十六日受附)